

第9回 文部科学省IB教育推進コンソーシアム関係者協議会
議事要録

■日時:2021年6月22日(火)14:00~16:00

■開催方法:ウェブ会議形式(Zoom 会議)

■出席者:

岩崎 久美子	放送大学教授 (会長)
遠藤 みゆき	関西学院大学教職教育研究センター准教授
荻野 勉	東京学芸大学附属国際中等教育学校校長
桜田 京子	神奈川県立横浜国際高等学校校長
末吉 弘治	星美学園静岡サレジオ理事長 学園長
田村 香江	香美市教育委員会教育振興課学校教育班指導主事
坪谷・ニューエル・郁子	東京インターナショナルスクール理事長/日本IBアンバサダー
原 和久	日本国際バカロレア教育学会理事
日色 保	日本マクドナルドホールディングス株式会社代表取締役社長兼 CEO
Daniel Reynolds	The IB Association of Japan (IBAJ)共同代表
渡辺 寿之	サニーサイドインターナショナルスクール園長/IBヘッド・カウンスル委員

■欠席者:

青木 一真 東京都立国際高等学校DPコーディネーター

■オブザーバー:

前田 紘平 国際バカロレア機構DLDPプロジェクトコーディネーター (昌平中学校・高等学校教頭)
松原 太郎 文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長

■事務局:アオバジャパン・インターナショナルスクール (文部科学省IB教育推進コンソーシアム事務局)

<議事次第>

- (1) 令和3年度関係者協議会構成員の紹介
- (2) 文部科学省IB教育推進コンソーシアムについて
- (3) 令和3年度のコンソーシアム活動について (IBに係る課題意識の共有)
- (4) 国際バカロレア (IB) を活用した大学進学に関する調査・活動 (案)
- (5) その他

<配布資料>

資料1 令和3年度文部科学省IB教育推進コンソーシアム関係者協議会構成員名簿
資料2 文部科学省IB教育推進コンソーシアムについて
資料3-1 令和3年度のコンソーシアム活動について
資料3-2 課題意識の共有について
資料4 国際バカロレア (IB) を活用した大学進学に関する調査・活動 (案)
席上配付資料1 令和3年度文部科学省IB教育推進コンソーシアム導入サポーター名簿
席上配付資料2 令和3年度文部科学省IB教育推進コンソーシアムACファシリテーター名簿

■議 題

(1) 令和3年度関係者協議会構成員の紹介

(2) 文部科学省IB教育推進コンソーシアムについて

※事務局から、資料2 に基づいて説明

(3) 令和3年度のコンソーシアム活動について(IBに係る課題意識の共有)

※事務局から、資料3-1に基づいて説明、各構成員から、資料3-2について発言

<IBに係る課題意識の共有>

◆青木構成員

(主な論点)

- ・IB 教育に携わる人材育成
- ・学習指導要領との整合
- ・国内大学の IB 入試

(事務局) 学校設定科目との兼ね合いもあるため、学習指導要領の読み替えの実際の運用については、学校により異なる実態があると認識している。

◆遠藤構成員

(主な論点)

- ・IB 教員養成に係る課題
- ・IB 校から大学に期待されること
 - ① IB 校同士の横のつながりについて
 - ② 大学の IB 入試のあり方について

(主な意見)

・勤務校にて今後 MYP の実習を受け入れる予定であるが、IB での教育実習の場合、単元全体を実習生に任せる必要があるのか。また、IB 教員養成の実習は通常の実習とは異なるが、その違いは何か。

・実習期間は2週間だが、DPは2年間の全体の流れに沿う必要があるため、実習生が独自の指導案を作成するところまでは困難とみている。一般的な日本の教育実習では実習要件が統一されている。IBの実習はIB機構で示されている要件があるが、具体的にどのように実施するのかはそれぞれの大学が独自の基準を作成していると思われる。しかしながら、要件を満たさなければならないということでは、日本の教育実習もIBの教育実習も同じである。

・IB入試に関して、海外の大学と比較して日本の大学は導入が進んでいないという声を、これまで高校側から聴いていたが、大学側から考えていこうという提言はありがたい。高校と大学にて課題意識を共有するのは重要だと考える。課題を解決していくことで、我が国におけるIB教育の制度の発展につながると思う。

◆荻野構成員

(主な論点)

- ・IB 教員の育成
- ・IB 入試の活用状況
- ・プログラム評価とその改善

(主な意見)

・IBAJは国内のIBを実施しているインターナショナルスクール校長のネットワークである。先ほど、IB校での実習生の受入れや、IB校間の人事交流などの提案があったが、インターナショナルスクールでは日本語で教えている先生もいるので、是非積極的にこのネットワークを活用いただきたい。インターナショナルスクールは、日本全国にあり、1条校とも協力したいという点では一致している。今後の連携相談はIBAJのRaynolds氏へご連絡いただきたい。

◆末吉構成員

(主な論点)

- ・学校が抱える諸課題について
- ・IBこそ一貫教育が望ましいのではないか
- ・ミッションステートメントについて
- ・哲学とTOKについて

(事務局) 公立校を含めた IB の一貫教育、IB の学習が継続可能かということについて、事務局として、自治体へのヒアリングをしているが、都道府県(主に高校を管轄)と市町村区(主に義務教育を管轄)の両方へのアプローチが必要と考えている。IB の公立校への導入では、幼小中高の接続性も大事であり、事務局としても自治体間での協力・連携を推進しており、事務局がその対話の仲立ちができればと考えている。

◆田村構成員

(主な論点)

- ・自治体が直面する課題
 - ① 地域住民、保護者の理解
 - ② 議会の理解
 - ③ 財源の確保
 - ④ 人事異動に伴う教員養成
 - ⑤ 教員数の問題
- ・課題解決に向けて
 - ① 「香美市の町づくり」とその実現のための教育行政の在り方
 - ② 市町村立学校の強みを生かす IB 教育 → 地域に開かれた学校教育
 - ③ 県教育委員会との連携強化
 - ④ 他市町村との連携

(事務局) 県教育委員会と、どのような対話があったか、県内の高知国際中学校・高等学校との連携についてお聞かせください。

(主な意見)

・昨年度より高知県立国際中学校から教員 1 名が異動している。香美市の教育行政をいかに理解していただけるか、他機関との連携強化を試みている。

◆原 構成員

(主な論点)

- ・国際バカロレア教育学会について
- ・IB 教育研究の普及促進における諸課題について
- ・IB 教育の学校への普及について
- ・IB コンソーシアムと IB 教育学会の連携について
- ・高校で DP を選択することのメリットについて
- ・海外の IB 教育との連携について
- ・コロナウィルスの影響について

(事務局) 今年度の IB 機構によるワークショップは、全てオンラインヴァーチャルにて実施予定である。

◆渡辺構成員

(主な論点)

- ・DP のあり方の全面的な見直しについて
- ・日本における IB 普及のための課題
 - ① IB の理念・学校教育の目的の再認識 (→ IB は SDGs 時代の教育である)
 - ② 全国自治体に向けた PR の強化
 - ③ エキスパートの育成 (→ IB に精通した窓口が足りていない)
 - ④ IB 機構との連携の強化 (→ 世界最先端の情報を入手する)
 - ⑤ 更なる予算の獲得 (→ 社会的に認知を更に上げる方法はないか)

(4) 国際バカロレア (IB) を活用した大学進学に関する調査・活動 (案)

※事務局から、資料4に基づいて説明

(5)その他

(文部科学省) コンソーシアム事業は、5年の事業期間の中で、今年度は4年目を迎えている。来年度に向けた方向性を検討していく中で、3つの課題があると考えている。

- ① これまでに日本国内でのIB教育の導入を進めてきたが、今後、IB教育をどう維持・拡大していくか。
- ② これまではDPを中心に、PYP及びMYPを含め200校を目指して導入を進めてきた。今後、教育の質や大学での活用等についても考えていく必要がある。
- ③ IBコンソーシアムの活動をどのように発展していくのか。

(主な意見)

・教育再生実行会議の第十二次提言(令和3年6月3日)において、「優秀な外国人留学生の獲得に当たっては、国際バカロレア(IB)の活用等による入学者選抜のグローバル化を促進する」と明記された。これは、主に海外大学からの優秀な留学生の獲得を狙ったものだが、IB生の優秀さに触れられていることは意義深い。この情報をコンソーシアムのHP等でも広く発信いただき、また国公立の大学関係者にも周知いただきたい。

・事務局において、本日の意見をまとめ、活動のフォローアップを行うとともに、活動の進捗があればメール等で報告してほしい。次回の会議は2022年2月17日(木)14-16時を予定している。また、必要に応じて、年度途中での開催も検討したい。

以上